

# カルマ・チャクメーの極楽願文 『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究

——往生の第四因、廻向の段——

中御門 敬 教

## 【抄録】

カギュ派、ニンマ派の学者・行者カルマ・チャクメー（ラーガアスヤ、1612-1678）著『大楽誓願』は、ツォンカパ（1357-1419）著『最上国開門』とともに、チベットで最も高名で普及した極楽願文であり、埋蔵経「虚空法（天空法）」に所属している。本稿においては藤仲孝司氏との協力のもと、この極楽願文に示された極楽往生の第四因、自他の極楽往生のためへの善根の廻向の段を、扱った。

キーワード：カルマ・チャクメー（ラーガアスヤ）、極楽願文、廻向、『清浄大楽国土誓願（大楽誓願）』

一昨年、昨年と、カルマ・チャクメー（1612-1678）の『清浄大楽国土の誓願』略称『大楽誓願』を、藤仲孝司氏と共同で翻訳研究して発表している。チャクメーはカギュ派・ニンマ派の学者・行者であり、いわゆる「無宗派運動 Ris med」の創始者の一人となった。この極楽願文はチベットでツォンカパの『極楽願文・最上国開門』とともに最も広く普及した二大極楽願文の一つであり、埋蔵経「虚空法（天空法）」の中心となる典籍である。すでに述べたように『大楽誓願』は極楽往生の四因の説示をその基本構造としているが、一昨年は、序分と、第一の因として無量光仏と観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の形相をたびたび作意する部分、第二の因として福德の資糧を積むことが七支供養として提示されているうち、七支供養の第一、帰命の支分、第二、供養の支分の部分を発表した。昨年は、それに続いて、七支供養の第三、懺悔の支分から第六、祈願の支分までを発表した。本年度、藤仲氏はそれに続く七支供養の第七、廻向の支分と、往生の第三の因として正覚へ発心する段と、第四の因として

善根を自他が極楽に生まれる因として廻向する段の冒頭について、発表する。本稿はそれに続く個所であり、内容は、往生の第四の因である善根の廻向の途中からである。翻訳研究の方針や記述方法については、昨年度の発表（『佛教学総合研究所紀要』19）を参照していただきたい。すでに述べたように、この願文やその註釈文献は文言が簡略または晦渋の箇所も少なくないが、できるだけ逐語訳に努めると同時に、理解しやすいように註において補足説明するようにした。

## 本文和訳

①解脱が（Toh.9a）無い輪廻の海から、〔あたかも〕大きな過ちの牢獄から解放される〔場合の〕ように、（祝 225）極楽の国土に、（宗 656）振り返ることなく逃れますように！貪欲・執着・愛好すべてを断ってから、驚が畏から離脱するように、西方の虚空にむかい無数の世界を刹那、瞬時に進んでから、極楽に到ります（PS15a）ように！

そこには無量光仏が現前に住しておられる〔一その〕顔を見てから、障すべてが浄められます（東洋 7b）ように<sup>(2)</sup>！〔胎生・卵生・化生・湿生という〕四つの生処<sup>(3)</sup>〔のなかの〕最高である、蓮華の芯に変化し、〔化〕生を受けますように<sup>(4)</sup>！

まさしく刹那に身体を完成してから、（Toh.9b）相好を具えた身体を得ますように<sup>(5)</sup>！〔極楽浄土に〕生まれないと疑う疑惑（猶予）により、（宗 657）五百年の（PS15b）間にわたり、その〔蓮華の〕中において安楽・幸福の受用を具えて、仏陀のお言葉が聞こえたとしても、花びらが開かなかったことにより、仏の顔を見るのが遅れる過失〔という〕そのようなことが、私に生じませんように！生まれるやいなや〔蓮の〕花が開いて<sup>(6)</sup>、無量光〔仏〕の顔が見えますように！

功德の力と神変によって、掌から供養雲を不可思議に放ってから、（PS16a）仏およびその眷属を供養しますように<sup>(7)</sup>！そのとき、かの如来が右手を伸ばして〔私の〕頭に置かれ、正覚の授記を得ますように<sup>(8)</sup>！甚深と（東洋 8a）（祝 226）広大の法<sup>(9)</sup>を（Toh.10a）聞いてから、（宗 658）自己の相続を成熟させて、解脱しますように！

観自在と大勢至<sup>(10)</sup>〔という〕勝者の子（菩薩）の二人の上足が、加持し、撰取して下さるように！毎日（PS16b）十方の無量の仏菩薩が、無量光〔仏〕を供養しその国土を見るために来られたとき、彼らすべてに親近・承事し、法の甘露を得ますように<sup>(11)</sup>！

<sup>(12)</sup> 無碍の神変でもって<sup>(13)</sup> 〔東方の〕妙喜国土（mNgon dga'i zhing）と〔南方の〕

具吉祥国土（dPal ldan zhing）, [北方の] 事業円満成就 [国土]（Las rab rdzogs）と [中央の] 密厳 [国土]（sDug po bkod）—<sup>(14)</sup>午前はそれらに行き, [各々の国土の教主である] 不動（阿閼）（Mi bskyod）, 宝生（Rin 'byung）, 不空成就（Don yod grub）, 大日（毘盧遮那）（rNam snang）（PS17a）などの仏に,（Toh.10b）（宗 659）灌頂と加持と律儀をいただいて, 多くの供養でもって供養してから, 夕方は極楽 [国土]（bDe ba can）に,（東洋 8b）困難なく到着しますように！

<sup>(15)</sup>ポタラ（Po ta la）<sup>(16)</sup>とアラカーヴァティー（楊葉宮）（lCang lo can）<sup>(17)</sup>, チャーマラ洲（rNga yab gling）<sup>(18)</sup>とウギャン国（U rgyan yul）<sup>(19)</sup>—[それら] 変化身の百の千万（コーティ）の国土において, [各々, 住する] 百の千万（コーティ）の観自在（sPyan ras gzigs）とターラー（sGrol ma）<sup>(20)</sup>, 金剛手（Phyag rdor）<sup>(21)</sup>, バドマサンバヴァ（Pad 'byung, 蓮華生）<sup>(22)</sup>にお会いし, 供養の海により供養し<sup>(23)</sup>,（PS17b）<sup>(24)</sup>甚深な灌頂と教誡をいただいて, 速やかに自らの住处 [である] 大楽国土に障碍なく到着しますように！<sup>(25)</sup>

<sup>(26)</sup>遺族, 僧侶の弟子などが天眼でもって明らかに見えて<sup>(27)</sup>,（祝 227）守護, 救護, 加持を為すし,（宗 660）死ぬとき [彼らを] かの国土に導けますように！<sup>(28)</sup>。この賢劫の劫の（Toh.11a）長さは極楽 [浄土] の一日です<sup>(29)</sup>。[そうして数えた] 無数である劫 [にわたって] 死がなく<sup>(30)</sup>, 常にその国土 [に生] を受けます（PS18a）ように！

## 註

(1) 『弁別釈』(62b6-65b5) に次のようにいう—

「第三, (63a) 後 [生] を中心にして誓願することには, 四つ—

1) 第一, そのもの

そこに至った直後, その極楽 [浄土] において変化の所依（sprul gzhi）である無量光仏<sup>※1</sup>が現前に居られる [その] お顔を見てから, 見た直後に, 見道の所断となっている障を微細なものをふくめてすべて浄めますように！ 化 [生] と胎 [生] と湿 [生] と卵生した, [すなわち] 四生処<sup>※2</sup>の最高である化生—それもまた, 「化生は多い。蓮華の茎からの生は稀である」<sup>※3</sup> というように, 蓮華の芯の雌しべに化生する, [すなわち] 生を受けますように！

それもまた, そこにおいて心が起こった直後の刹那に [即時に] 身体を完成して, 相好を具えた身を得ますように！<sup>※4</sup>

<sup>※5</sup> 因の資糧を（63b）積んで, 縁の誓願を立てていても, 「ああ<sup>※6</sup> [極楽浄土に] 生まれるのか生まれぬのか」という疑惑が生じたなら, 生まれぬことを疑う疑惑の力により, 五百年の間, その蓮華の中において安楽・幸福の受用を具えていても, [阿弥陀] 仏のお言葉が聞こえたとしても, 花びらが開かなくなることがありうるので, 仏のお顔を見るのが遅れる過失 [という] そのようなことが, 私には生じませんように！ そのようなことが生ずる

ことも、勝者のお言葉を信認しないことの過失なので、それもまた勝者のお言葉を信認しますように！と誓願することが必要です、と仰っています。そのようでなくて、生まれるやいなや花びらが開いて、主無量光のお顔が見えますように！

その直後、法蔵比丘の誓願<sup>※7)</sup>と(64a)自己の福德の力と神変により、両手の掌から供養雲を不可思議に放ってから、仏およびその眷属を供養しますように！

そのときに、かの如来が百の福德から成立した右手<sup>※8)</sup>を伸ばして、私の頭に〔手を〕置いて、「未来にこの国土においてこういう仏になる」といって、正覚への授記を得ますように！授記を得た直後、第八〔不動〕地と福分が等しい、と仰っています<sup>※9)</sup>。或る学者〔すなわち、勝義の菩薩〕地を得た者以外が極楽に生まれることは、〔了義ではなく〕意趣を持ったものだと言う人が、見られます<sup>※10)</sup>。

それは次のように理解することが必要です—現在、その国土に生まれる因の資糧<sup>※11)</sup>に勤める者たちは、(64b)今日明日臨終において息絶えるのと近いなら、法蔵比丘のかつての誓願の力により変化の仏が出現なさったのとお会いして直後に、第一〔歓喜〕地を得た者と福分が等しくなる。よって、その国土に生まれるのです。よって、これは『経』<sup>※12)</sup>自らの稀有な早道である、と仰っています。甚深と空性<sup>※13)</sup>、広大な菩薩行の大波濤の法門を得てから、自己の相続を成熟させて、解脱しますように！

菩薩〔である〕観自在と大勢至、すなわち仏の長子二人もまた加持し、摂取していただきますように！毎日十方〔世界〕の他の国土から無量の仏と菩薩たちが(65a)、無量光〔仏〕を供養し、その極楽国土を見るために来られるときにも、彼らすべてに対して親近・承事し、正法の甘露を得ますように！

他の浄土について<sup>※14)</sup>神変により見るよう誓願することは、無碍の神変でもって、東の歓喜国と南の具吉祥国、北の業成就国と中央の密厳国土、<sup>※15)</sup>〔自ら〕朝、それらの国土に往き、順次、不動、宝生、不空成就、毘盧遮那などの仏に対して灌頂と加持と律儀をいただいて、多くの供養により供養してから、夕方に極楽に(65b)、困難なく至りますように！同じく、南方のポタラとアラカーヴァティー（楊柳宮）、南西のチャーマラ（猫牛）洲、銅色吉祥山、西方ウギャン、空行者の国など、変化身の百の千万（コーティ）の国土〔において〕、百の千万（コーティ）に観自在とターラー尊と、金剛手、パドマサンパヴァにお会いして、海のような供養により供養し、甚深な灌頂と教誡をいただいて、速やかに自己の本拠の大楽国土に、障碍なく到着しますように！」

※1) ここでの無量光仏は受用身ないしその基体である法身と位置付けられ、極楽浄土の莊嚴や集会において姿を現す姿はそれにより化作されたものであるということになる。法身であれば、『往生論』の「入一法句」に相当するものになる。cf. 梶山雄一「浄土の所在」（前田恵学編『渡邊文麿博士追悼記念論集 原始仏教と大乘仏教下』1993）

※2) 次の訳註3を参照。

※3) 出典未確認。

※4) 註5を参照。

※5) 訳註4を参照。『大楽国土誓願の註疏』p.275には次のようにいう—

「尋思・伺察にこだわる劣った知の、「ああ生まれるのか生まれないのか」と思う、〔すなわち〕二を取らえる疑いの疑惑を持ったことにより、四因<sup>※)</sup>を修証した力によりその国土に生まれても」

※) この後の※ 11 を参照。

- ※6) i とあるが、意味をなさない。『大楽国土誓願の註疏』p.275 に e とあるのを採る。
- ※7) 訳註 7 を参照。
- ※8) 訳註 5 を参照。
- ※9) シチュ派の女性開祖マチク・ラブキドンマ (Ma gcig lab kyi sgron ma. 1031–1129) の著作とされる『誓言二十一 *Sras rgyal ba Don grub la mKha' 'gro'i gsang tshig tu gdams pa Dam tshig nyi shu rtsa gcig pa*』の所説の一つである。藤仲論文に参考資料として翻訳しておいた。この典籍は、カルマ・チャクメー著『虚空の法、大楽国土を成就する灌頂を整然と配置したもの』に引用されているが、原本の所在や伝承などは不明である。cf. Kapstein, Matthew T., *Pure Land Buddhism in Tibet?: From Sukhāvātī to the Field of Great Bliss (Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha. ed. by Richard K. Payne and Kenneth K. Tanaka, A Kuroda Institute Book, University of Hawai'i Press, 2004) p.22, 45*; また、ディグン・カギユ派の開祖キョブパ・ジクテンゴンポ (sKyob pa 'Jig rten mgon po 1143–1217) の『極楽願文』にも、ニンマ派のカトクパ (Kah thog pa Dam pa bde gshegs. 1122–1192) が極楽往生して第八地を獲得し、「ロドーニンポ」(慧蔵) となったことを、伝えている。

なお、『無量寿経』自体には「一生補処の願」が言われるし、通常、一生補処は第十法雲地に指定されるので、極楽往生した者は第十地になるという考え方もあるのではないと思われる。これについては、後に五眼に関するところで言及する。

- ※10) 上記のマチク・ラブキドンマの典籍に、見道未満では誓願しても成就できないことが言われているが、これは菩薩がまだ凡夫であって資糧道、加行道にあり、まだ大地に至っていないということになる。それに対して、見道すなわち空性を直接的に見る段階に至ったことは、見所断の三結（俱生の有身見、疑、戒禁取見；欲界に結びつける五下分結に含まれる煩惱である。cf. 『俱舍論』V 44) を、断って聖者となったという意味である。見道に至って空性を直接的に証悟することと無量光仏を見ることは、初期仏典や大乘の『稲苺経』に「法を見る者は仏を見る」といわれること、あるいは『般舟三昧経』『月灯三昧経』での空性三昧による見仏、唯識派での「地上の菩薩」の見仏（見道、修道の菩薩が仏の受用身を見ることができるとも一致する。『普賢行願讚』v. 57 への註釈にも関連事項が言及される。そのうちシャーキャミトラ釈には、往生して無量光仏を見るとき、悪業、煩惱障、異熟障は除去されたが、まだ所知障は残っているとされているように、地上の菩薩であってもいまだ修道を残した有学の聖者である。なお、『無量寿経』「声聞無数の願」に関して、『往生論』には、極楽浄土にいるのは声聞なども化作されたものであって、清浄の菩薩のみであるという記述もある。

なお、『大楽国土誓願の註疏』p.275 には、「いつか第八地を得たそのときかの如来が百の福德より成就した右手を伸ばして」(下線部は本頌) などという。

- ※11) 具体的には、『弁別釈』4b に指摘されたように、1) 無量光仏や極楽浄土の形相をたびたび作意すること、2) 福德の資糧を積むこと、3) 正覚へ発心すること、4) 善根を自他が極楽に生まれる因として廻向すること、という四つの因をいうのであろう。『大楽国土誓願の註疏』pp.276–278 にも「四因を修証する」という文言が四回も出てくる。もちろんこれはツォンカパの極楽願文『最上国開門』において『無量

寿経』を典拠として説かれたことである。

- ※12) 典拠としての『無量寿経』,あるいは秘密真言に対するものとしての顕教を意味するのであろうか。ちなみに龍樹著『十住毘婆沙論』「易行品」第九には,その名号を称えることが不退転に到る易行の道であるとされている。cf.『新国訳大蔵経 十住毘婆沙論 I』(1994) pp.155-156
- ※13) 『大楽国土誓願の註疏』p.278にも,「甚深と(dang)空性と広大な行〔である〕六波羅蜜など」などという。通常は「甚深」は空性の形容詞ないし同義語であるから,接続詞 dang は不要であり,「甚深な空性と広大な菩薩行」とあるべきではないかと思われる。
- ※14) zhing gzhan du とある。『大楽国土誓願の註疏』p.280には,「他の浄土に行くことを誓願する」となっている。
- ※15) ここに nang (内)とあるが,意味をなさない。rang (自ら)の誤字であらうか。『大楽国土誓願の註疏』p.280には,「五族の国土それらに(rigs lnga'i zhing de dang rnam su)」とある。註14を参照。
- (2) 直前の訳註に示した『弁別釈』では,見道所断の煩惱(見惑)の浄化が言われている。直前に出した『弁別釈』の※10を参照。
- (3) 一切有情を生まれより分類した四生の有情については,『俱舍論』AK III 8-9への『自註釈』を参照。和訳山口益,舟橋一哉『俱舍論の原典解明 世間品』(1955) pp.64-66;『俱舍論自註釈』(山口,舟橋訳)に次のようにいう—
- 「化生の生とは何ぞ。或る諸有情にして諸根無缺にして劣れるに非ず<sup>※)</sup>,一切の肢と及び節とを具して,一時に生じたるものなり。それ故にこそ,彼等は生ずることにおいて善妙に為すものなるが故に,化生と言はる。即ち天・地獄・中有等の如し。」
- ※)『無量寿経』チベット訳第42願には,極楽に諸根不具の者はいないことが言われる。
- cf.『浄全』23, p.251
- 四生のうち化生が最高であることの理由について,『大楽国土誓願の註疏』p.275に,「自己と父母を害することが無いから。」という。cf.山口,舟橋同上(1955) p.72
- (4) 極楽浄土における蓮華からの化生について,『無量寿経』チベット訳(cf.『浄全』23, p.312)には,次のように出ている—
- 「マイトレーヤよ,そのように〔極楽往生への〕疑いに墮ちることによって,善根を生じさせ仏の無等智と平等智に対して疑惑を抱く菩薩たち彼らが,仏の名号が聞こえるそのことと澄浄なその心によって,かの極楽世界に生まれるとしても,〔諸々の〕蓮華に結跏趺坐しつつ化生し出現するのではないが,〔諸々の〕蓮華の胎に住することを経験する。彼らはそこについて園林と無量宮だと想って住する。糞尿はなく,唾はなく,鼻水はなく,意にそぐわないものは生起しないが,五百年間において仏が見えることと,法を聞くことと,菩薩が見えることと,十分な法談を決定することと,善法を行わずにすべてを欠いているのである。彼らはそこで歓喜せず喜悦を得ないが,以前の罪過が尽きてから,彼らは〔諸々の〕蓮華の胎から出現する。彼らはそこから出現しても,上〔に出る〕か,下〔に出る〕か,側面〔に出る〕かを知らない。」
- 梵本,漢訳の対応箇所は,藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」(『佛教学総合研究所紀要別冊 浄土教典籍の研究』2006) note 87を参照。
- 『大楽国土誓願の註疏』pp.277-278には次のようにいう—

『経』<sup>※1</sup>)に世尊に対してマイトレーヤ（弥勒）は、その国土において有情の或る者は蓮華の胎に居る、或る者は蓮華の上に結跏趺坐しているのが見える—それらの理由は何なのかを訊ねたので、世尊は前者は疑いを持った者が善根を修証してから誓願を立てたし、後者は疑いの無い者が修証したものであるなど、多くの譬え・意味を説かれている。その過失もまた、勝者のお言葉を信認しないことによってです。信認の信を持った者において、そのような過失は生じない。よって、勝者のお言葉を信認してください、と誓願もすべきです。

一般的に、仏のお言葉に未了義と了義の差別（ちがい）は多いが、このようなことについて未了義・了義などとして伺察したなら、「尋思し伺察する論理学者は、彼において成就は遠いと説明する」<sup>※2</sup>)と説かれたのはそれです。この虚空が事物になって、日月が地面に落ちることはありえても、無量光の誓願と仏のお言葉はけっして欺くことがありえないし、仏の智の義（対象）については声聞・独覚も知が起ることができない。よって、自己が極楽に生まれるか生まれないかなどを知らなくても、仏が知られないことはありえないので、一切智者のその智慧を諦（真理）の証人と確立して、知の疑惑を捨てて、〔極楽往生の〕四因を修証するのと、シャーンティデーヴァ〔『入行論』<sup>※3</sup>)に〕が「牟尼のお言葉は欺かないので、これの功德は後で見えることになる。」と説かれたとおりであり、仏陀が国土の莊嚴を説かれたとき、アーナンダが「世尊よ、私には疑いや疑惑や懷疑はありません。私は未来の有情たちの疑いと疑惑と懷疑を除くために如来にこの義（こと）をおうかがいします」と仰ったの<sup>※4</sup>)を信認すべきです。」

※1) 直前の引用を参照。

※2) 未確認。ここで未了義・了義に関する分析をすべきでないということは、唯識派の「別時意趣」において称名のみで往生できるという説は未了義だとする議論に反論するものであろうか。チベットで、「別時意趣」に対する浄土教からの発言は、チョナン派のトルボバ・シェーラブ・ギェルツェン（Shes rab rgyal mtshan. 1292–1361）、ニンマ派のジュ・ミーパム・ギャムツォ（Ju Mi pham rgya mtsho. 1846–1912）に見られ、経のことばへの信解を強調するものとなっている。

※3) VIII 156cd ; ツルティム・櫻井『中観哲学の研究 VI』(2009) pp.138–139

※4) cf. 『浄全』23, pp.276–277 ; 『無量寿経』、『阿弥陀経』の原題も内容ともに「国土の莊嚴」を意味するが、ここでの典拠は前者である。極楽浄土には山々や海が無く平坦であることを聞いて阿難尊者がスメール山やそこに居る諸天について質問し、釈迦牟尼から業の異熟と業の造作が不思議であることを教えられた個所である。

チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」には次のように説いている—

「因は最上の正覚へ発心し、十善〔業〕道・広大な福德を積んだ。そのすべてをその国土に生まれるために廻向する。一心不乱の信仰により、その国土に生まれる廻向・誓願を、十回ほど為したことにより生まれるとお説きになった。「それは真実でない」と疑うのなら、その国土に生まれても、五百年にわたり華が開かない。そこで安楽・幸福の受用を具えて、無量光尊のお言葉を聞けけれども、五百年にわたりお顔を見ることが遅れるであろう。そのために疑いを棄ててください。」

典拠などについては、藤仲同上（2006）pp.75–76を参照。

また『大楽国土誓願の註疏』pp.274–275には次のようにいう—

「現在、異生（凡夫）の所依〔の身〕において〔極楽往生の〕四因を修証したなら、今生

から〔菩薩の大〕地を得ている必要はない。死去したとき資糧道の法流〔三昧〕<sup>※1)</sup>を得た者と同じく、仏のお顔を見るし、お言葉を聞くし、見道が生ずることをタントラ、上師などは説かれた。『経 mdo』<sup>※2)</sup>にもまた、誓願と善の力により極楽に生まれても、業障が大きいなら、八万年の間、無量光〔仏〕が法を説かれるのが聞こえて〔も〕、それを知ることにならないし、ただの光ほどが見えてお身体そのものが見えないし、光が〔自己の〕身に当たらないし、それから障を浄めてからやっと見えるし、法を知ってから授記を得ることもあることを、説明している。これと、蓮華の胎に生まれてから〔無量光仏の〕お顔が見えないことなどのゆえに、異生（凡夫）は極楽〔浄土〕に生まれることが成立している。『光経 'Od mdo』<sup>※3)</sup>に、無量の十方より〔五〕無間〔業〕と法を捨てるのを行った者以外、有情たちは私の名が聞こえて善根を仏国土に廻向を行ったなら、私のその仏国土に生まれるように！彼らが亡くなる時、仏およびその眷属が見えて、彼らのあらゆる業障は止滅するように！というその誓願が成就したのであるから、障の大きいのと疑いがあるなら、〔仏の〕お顔が見えないのが見えると、障礙を浄めるのです。』

※1) 『大乘莊嚴經論』MSA XIV 3に「法流において諸仏から教授を受ける」という。また XI 11 の十八種作意の第十四として領受作意として述べられている。これらの箇所ではスティラマティの『復註』には、信解行地における四種三昧、特に世第一法の三昧を「法流三昧」というと説明している。これは浄土における空性の証悟すなわち見道の直前としての位置付けと言えるであろうか。cf. 長尾雅人『撰大乘論 和訳と註解 下』(1987) p.113; 同『大乘莊嚴經論』和訳と註解 (2)』(2007) pp.245-246, 52

※2) 未確認。直後の註記を参照。

※3) 『無量寿経』梵本の第 18, 19 願（魏訳も同じ）を参照。また臨終時に障が減することについては、『行願讚』v.57 を参照。

蓮華の胎に生まれるということに関しては、『往生論』には「入の第三門とは、一心専念に彼に生ぜん」と作願して、奢摩他寂靜三昧の行を修せるを以ての故に、蓮華蔵世界に入ることを得。是れを入第三門と名づく」（『聖典』一, p.371; 『浄全』1, p.198）というように、蓮華蔵世界を極楽浄土と関連づける表現もあり、その異同については議論がある。cf. 藤村同上 (2006) note 52

- (5) 『無量寿経』チベット訳の第 20 願（魏訳第 21 願）に三十二相の完成が願われている。身体の成就と相好の完成は菩薩行の完成を含意したものである。cf. 『浄全』23, p.242; 『普賢行願讚』v. 57 へのディグナーガやシャーキャミトラの註釈において、往生後に波羅蜜と相応した身体の獲得が説かれている。cf. 中御門 (2004) p.38, p.51 note 9; なお、相好各々は、菩薩行における無数の善より成立したとされ、それらはまた実体視されるべきではないと説かれることが多い。cf. 岡田行弘「三十二大人相の成立 (I)」(『印度学仏教学研究』38-1, 1989 年), 同「三十二大人相の成立 (II)」(『印度学仏教学研究』40-1, 1991 年)
- (6) 蓮華の花びらが開くことは、Buddha (仏陀) の語義解釈としては、無明の眠りより目覚めたことと、所知に対して智慧の広がったことがいわれ、それは蓮華が花開くことに喩えられる。例えば、チャンドラキールティ著『帰依七十頌』(D No.3971 Gi 251a2-3) には、「三世の道から解脱し、所知について知が広がった。迷妄の閉じたものを破ったから、仏陀は蓮華のように広がった。初め・終わりの無い〔輪廻の生存・〕有において、無明の眠りにより眠った〔世の〕衆生において現れるものごとは、偽りであり、夢のようだと主張なさる。無



明の眠りは相続を断ったし、正しい智慧が生起したので、今や彼は仏陀。人が眠りから目覚めたように。」という。マートリチュータ著『三宝讃』（D No.1144, P No.2035）に対する、ジナプトラ著『三宝讃註』（D No.1145, P No.2036）の冒頭にも同趣意が出る。cf. 石川美恵『SGRA SBYOR BAM PO GNYIS PA 二巻本訳語釈』（1993）p.9

- (7) 『無量寿経』では、極楽往生後の有情済度として梵本、チベット訳の第21願（cf. 『浄全』23, p.242）に、往生した者すべてが諸世界すべてに菩薩の行を実践しよう、仏すべてを恭敬しようとするように、第22の誓願に、往生した者すべてが善根を生じさせる供養の品々が、心に願うやいなや生ずるように、といった内容が見られる。また、『同経』の成就を語る部分（cf. 『浄全』23, pp.296-298）にも、極楽浄土に生まれた菩薩が、十方の無数の諸仏世尊を供養したいと心に願うやいなや、手から無数の供養の品が生ずるなどという。「雲」はそれが多数であることを意味する。神変の雲による有情の救済については、『普賢行願讃』v.60に言及されている。その用例については、中御門敬教「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学仏教学論叢』2004）p.40ff., 同（2012）p.8 note 21を参照。
- (8) 『無量寿経』梵本、チベット訳の第21願が一生補処を願うものであり、それを重説した箇所（『浄全』23, p.243, p.296）には、釈迦牟尼仏により、「彼らすべては一生補処になってから、無上の正等覚へ現等覚するであろう。」などといい、授記という言葉は無いが、その内容が示されている。『無量寿経』に見仏、聞法の内容について明記はないが、『阿弥陀経』『観無量寿経』にはそれらを含めた往生後の修行が言及されている。また『普賢行願讃』vs.57-60には、極楽往生と現前での授記が明示されている。授記には幾種類かある。『大乘莊嚴経論』XIX「功德品」35-37には、授記について人の差別によるもの、時の差別によるものという区別が示され、前者は未発心の授記、已発心の授記、現前の授記、非現前の授記、後者は有数時の授記、無数時の授記とさらに区別されている。cf. 長尾雅人『大乘莊嚴経論』和訳と註解（4）（2011）p.29ff.; 『普賢行願讃』v.59への釈をも参照。
- (9) 通常、甚深の法は『般若経』などの空性の法とそれを註釈したナーガールジュナの所説、広大な法は『現観莊嚴論』や唯識派など修行の階梯を解説したマイトレーヤの所説をいう。各々、智慧の資糧と福德の資糧と理解することも可能である。『無量寿経』には見仏、聞法、歓喜が説かれるが、その聞法の対象は大乗の法のはずである。「広大な行」は通常、菩提行を意味し、『同経』にいう諸国土へ赴いての利他行に相当する。後の瑜伽行派や天台などにおける「自誓受戒」も見仏により聞法、受戒するものである。すなわち、菩薩としての行動規範を授けられるのである。
- (10) 脇侍の両菩薩についての記述は『無量寿経』に対応が見られる。アーナンダが両菩薩の名を問ひ、釈尊が答えるという形であり、魏訳巻下冒頭以下である。cf. 『浄全』23, p.296; チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」でも両菩薩が言及される。cf. 藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」（『佛教学総合研究所紀要別冊 浄土教典籍の研究』2006）pp.84-85
- なお、チャクメー著『虚空の法、御心の埋蔵、甚深聴伝の類から、大楽国土の成就法の唱える部分 *gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing gi sgrub thabs 'don cha*』の阿弥陀三尊を観想する箇所では、各々の蓮華上の月輪座の上に無量光仏は赤色の身に一面二臂、禪定印、金剛結跏趺坐の姿、右の観自在は白色の身に一面四臂、蓮華の鬘を持つ姿、左の金剛手大勢至は青色の身に一面二臂、金剛杵・鈴を持つ姿で坐り、無数の仏・菩薩・声聞に圍繞されたものとされている。

- (11) 『無量寿経』のいわゆる「東方偈」とその直前の散文に、諸方の国土の諸仏が称讃し、菩薩が無量光仏や浄土の莊嚴を見るために訪ねてくることが、言われている。『無量寿経』のこの箇所は、臨終を迎えた者が極楽往生することを述べた直後にも当たり、本極楽願文とも文脈が対応している。意味としては極楽浄土の菩薩たちが自由に瞬時に他の仏国土を訪ね、仏を供養し、受法するのと同じく、他の国土の仏、菩薩（もちろん大きな力を持った菩薩のみであろう）もそうできるということになる。現行の梵本には無いが、魏訳にはそのことが可能な根拠として、「無量寿仏の威神極まりなし」ということを挙げている。cf. 『浄全』 23, p.288ff.; 『大楽国土誓願の註疏』 p.280にも教証として、「『経』に「導師無量光仏に対して礼拝せんがために、十方の無辺のガンジス河の砂ほどの仏国土より、彼ら円満な菩薩は到来した。」などという。」と、示している。これは上記「東方偈」の冒頭である。cf. 『浄全』 23, pp.290-291; また「甘露 amṛta」は無死を意味し、涅槃の同義語でもある。無量寿仏の極楽浄土において無限の生命を得たといった含意になる。
- (12) 『弁別釈』 65a3は、この箇所について「他の浄土を神変により見るよう誓願すること」という見出しを与えている。『無量寿経』では、法蔵比丘の誓願のうち、第7, 8, 9願には、極楽に往生した者は無数の世界に関して天眼通、天耳通、他心通を獲得するように、第31願には、無数無辺不可思議の仏国土が顔が鏡に映ったように見えるようにとの誓願がある。また、釈迦牟尼仏がアーナンダに無量光仏を礼拝するよう勧め、アーナンダが極楽浄土とその聖衆を見たいと願う。無量光仏は大光明を放って、無数の仏国土を照らし、会合の四衆がそれを見るといった記述がある。cf. 『浄全』 23, pp.304-306, 238, 247
- (13) 以下の諸方の仏と国土は、『大楽国土誓願の註疏』 p.280が指摘するように、「五族の国土」、すなわち金剛界マンダラの五仏が率いる五族である。これら諸仏とその国土については、チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」にも言及されており、それらのなかから時代と自らの機根を考えて極楽浄土が選択されている。東方の妙喜国土とその教主不動（阿閼）如来、受用身である毘盧遮那仏の成仏する場所としての密厳国土は、典拠の經典も含めて有名であるが、それ以外の国土については未詳である。cf. 藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」（『佛教学総合研究所紀要別冊浄土教典籍の研究』2006）p.63ff.; なお『無量寿経』（『浄全』 23, pp.314-316）、『阿弥陀経』（『浄全』 23, pp.348-352）にも他方の諸世界とその諸仏が言及され、そこからの極楽往生や彼らによる極楽への称讃が説かれているが、それらは参照されていない。
- (14) 他方の仏国土に行き、そこで仏を供養し、再び戻ってくるということは、『無量寿経』チベット訳の法蔵比丘の第22願（『浄全』 23, pp.242-244）と、誓願の成就文の末尾（『浄全』 23, pp.292-293）とそれに続く部分（『浄全』 23, p.298）、『阿弥陀経』の極楽の浄土と聖衆を説く箇所（『浄全』 23, pp.344-345）に出てくる。特に『無量寿経』の誓願の成就文の末尾は「神変によって」という文言も対応している。その梵語原典（『阿弥陀経』も同様である）には、「一つの朝食前の時間に」「朝食時間に」という短時間のことであるが、チベット訳の法蔵比丘の誓願では「一つの午前のように」となっている—ここで言うように、夕ぐれに戻ってくるということではない。この翻訳の問題は、中村、早島、紀野『浄土三部経（上）』（1963）p.257、藤田宏達『梵文和訳 無量寿経』（1975）p.194に指摘されており、日本語で「朝食前」というと瞬時にといった含意があるためか、前者には「しかしこの空想はチベット人にとっては余りに極端なものであった。」と論評されている。しかし、これは朝、行乞に出かけ、戻ってきて正午までに朝食をとるという出家生活の行動と重ねて考えるなら、

- 「一つの朝食前の時間に」ということは「一つの午前のように」ということと、さほど遠くないのかもしれない。
- (15) 諸菩薩や成就者の住居への言及である。これらについても、上記のようにチャクメー著『山法・独居修行の教誡』より第42章に言及されている。
- (16) 観自在菩薩の住む南の島である。『大楽国土誓願の註疏』p.281には「南」と形容されている。チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」には、チベット語では *Ri bo gru 'dzin* (船を持った山) であり、そのありさまが記述されている。チベットで盛んな「オーム・マニ・パドメー・フーム」の六字真言を唱える人はみな、ここへの往生を誓願するという。
- (17) 秘密主金剛手菩薩の住居であり、宝積部第三会『如来不可思議秘密説示大乘経』においてその荒涼たるさまが示されている。ある種、タントラ的なものである。『大楽国土誓願の註疏』p.281には「北東」と形容されている。チベットでは金剛手を大勢至菩薩の忿怒形とすることが多い。註21を参照。
- (18) 梵語 *Cāmara* (遮末羅)。名前はヤク(犛牛)の尾から作った払子を意味し、『藏漢大辞典』には「猫牛」と漢訳されている。これは南ジャムブ洲の西にある島であり、八中洲の一つであるが、羅刹の国とされ、パドマサンバヴァが住しているとされている。『大楽国土誓願の註疏』p.281には「南西」と形容されている。次のウギャンと同一視される場合もある。チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」には、そのようすを記述し、ニンマ派の人がそこに往生することを誓願するとされている。
- (19) 後期密教の伝法者インドラプーティ王の国ウッディヤーナ (*Uḍḍiyāna*) の転訛である。チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」にも言及されている。cf. 羽田野伯猷「Tāntric Buddhism における人間存在」(『チベット・インド学集成 第三巻 インド篇 1』1987, pp.56ff.); 藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」(『佛教大学総合研究所紀要別冊 浄土教典籍の研究』2006) note 53
- (20) 『大日経』では蓮華部の一女尊であったが、金剛界系統のマンダラにおいて四隅のうち北東に置かれ、空成就如来との配偶関係にある明妃になった。また、観自在菩薩の涙の池に咲いた蓮華の中から生まれたともされ、観自在菩薩の配偶者や眷属とされる場合もある。八難からの救済者として、そして女性の身体のまま成仏した尊格として、インド仏教後期以降、大流行した。cf. 頼富本宏『密教仏の研究』(1990) p.342; 田中公明『チベットの仏たち』(2009) pp.158-162
- (21) 金剛手は、観自在、文殊師利とともにチベットで特に人気のある三大菩薩であり、力を象徴し、八大菩薩に含まれる場合もある。チベットでは大勢至菩薩の忿怒形とされることが多いが、これはすでにインドで見られたことであり、漢訳にも伝わる密教経典、唐不空訳『金剛恐怖集会方広軌儀観自在三世最勝心明王経』や宋法天訳『一切如来烏瑟膩沙最勝総持経』には、阿弥陀三尊のうち大勢至が金剛手に置き換えられている。cf. 入澤崇「鬼神の仏教—護法神執金剛と菩薩金剛手」(『印度学仏教学研究』33-1, 1984)
- ミーギェル・ドルジェまたはチャクメーの著『虚空の法、御心の埋蔵、甚深聴伝の類から、大楽国土の成就法の唱える部分 *gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bDe chen zhing gi sgrub thabs 'don cha*』においても、無量光三尊を観想する個所にも、「金剛手大勢至」として同一視されている。また、秘密主金剛手がニンマ派のホダク・ドゥッチェン・レーキドルジェ (*lHo brag grub chen Las kyi rdo rje*, 生没年不明。ホダク・ドゥッチェン・

ナムケーギェツェン lHo brag grub chen Nam mkha' rgyal mtshan, 1326-1401 の弟子) に授け、後にゲルク派のハルハ・タムチク・ドルジェ (Hal ha Dam tshig rdo rje. 1781-1855) にも継承された、『無量寿仏と金剛手の双蓮した成就法』といった法類もある。

- (22) チベットに初めて仏教が伝えられたとき、顕教の大学者で律の親教師でもあったシャーンタラクシタとともに来て、密教を伝え、土着の神々を調伏したとされる。パドマサンバヴァについては様々な伝承があるが、タントラの聖地ウッディヤーナ国のインドラプーティ王の王子とされており、妹ラクシュミーとともに後期密教の伝承者として重要な役割を担っている。広く民間で信仰され、後世の仮託を含めた多くの著作がある。ニンマ派の Nyang ral Nyi ma 'od zer (1124-1192) などのように、法身は無量光仏、受用身は観自在、変化身はパドマサムバヴァと言う説も流布している。cf. 平松敏雄『西藏仏教宗義研究 3 トッカン『一切宗義』ニンマ派の章』1982) p.103, 126; 藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」(『佛教学総合研究所紀要別冊 浄土教典籍の研究』2006) note 51; 羽田野伯猷「Tāntric Buddhism における人間存在」(同『チベット・インド学集成 第三巻 インド篇 I』1987)

- (23) 菩薩として広大な行を行うことを説いた『普賢行願讃』vs. 5-6 には、様々な供養を行うことが説かれている。同じく vs. 39-40 には、その修行の広大さを海に喩えて、「海のような国土を清浄にして、海のような衆生を解脱させて、海のような法を観察させて、海のような智慧に証入させて、海のような修行を清浄にして、海のような誓願を完成して、海のような仏を供養して、海のような劫を、倦むことなく、私は修行しますように。」などという。cf. 中御門 (2012) (Bhad 釈 vs. 39-51) pp.4-8, 27-32, 43-54

『大楽国土誓願の註疏』p.281 には、「外・内・秘密の供養」という。三種類の供養については、高田仁覚『インド・チベット真言密教の研究』(1978) pp.478, 523 を参照。

- (24) 先の註9で言及した、対になった「甚深と広大」とは異なって、ここでは密教を形容する言葉である。ただしその基礎付けである顕教も欠かさせないから、『大楽国土誓願の註疏』p.281 には、「相乗(顕教)の法と、金剛乗と共通と非共通の甚深な灌頂と教誡」という。

- (25) 『弁別釈』(65b5-66a4) に次のように、インド、チベットの仏教者たちにも言及している—「概して、<sup>※1)</sup>吉祥主聖者ナーガールジュナ<sup>※2)</sup>と、[サキヤ派の祖師]サチェン・クンガールニンポ (Sa chen Kun dga' snying po)<sup>※3)</sup>などもまた、極楽に〔往生して今そこに〕居られる。[ニンマ派の]法主カートクバ・チェンポ (Kaḥ thog pa chen po Dam pa rin po che bde gshegs shes rab seng ge) ダムパ・リンポチェ・デーシェク・シェーラブセンゲ<sup>※4)</sup> [であった] (66a) 菩薩 [である] ロドーニンポ (Blo gros snying po. 慧蔵) と、ツァントン・ドルジェ・ギェルツェン (gTsan ston rDo rje rgyal mtshan)<sup>※5)</sup> [であった] ダウエーニンポ (Zla ba'i snying po. 金剛幢月蔵) と、チャンガワ・ソナムブムパ (sPyan snga ba bSod nams 'bum pa)<sup>※6)</sup> [であった] ノルブーニンポ (Nor bu'i snying po. 福德十万宝蔵) という名で、[現在、]極楽に居られる。さらに、歴代の祖師はほとんどそこに居られる。ニンマの大成就者はほとんど大ウギャン [・パドマサンバヴァ] のもとに持明者の列に居られると、仰っている。」

※1) 以下の極楽往生したと伝えられる人物については、チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」にも挙げられている。ここでは言及されないが、「国土の選択・財宝を受けとる船主」には、タクポ・カギェ派の祖師タクポ・ハジェ、シャンパ・カギェ派の祖師クンポ・ネルジョル、サキヤ五祖の一人ソナムツェモ、ニンマ派のドン・ケーチュ・ナムケーギェルツェン (ホ

ダク・レーキドルジェと同一人物か)、ゴルパ・ドルジェチャンといった名が挙げられている。cf. 藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」(『佛敎大学総合研究所紀要別冊 浄土敎典籍の研究』2006) pp.85-86;

- ※2) 西暦 150-250 年頃の人と考えられている。ナーガールジュナの出現とその極楽往生に関する予言としては、わが国 (例えば親鸞著『敎行信証』、『浄土高僧和讃』) と同じくチベットでも『入楞伽經』(D No.107 Ca 165b5-6; 大正 14 No.672 p.627c) のものが有名である。さらに、『大法鼓經』(D No.222 Dza 100b5-6, 122b2-123a3; 大正 9 No.270 p.294a, 298a), 『秘密集會タントラ』に対するチャンドラキールティの註釈『灯作明』D No.1785 Ha200b1-3 の記述も知られている。cf. ツルティム・ケサン, 藤仲『中観哲学の研究 III』(2001) p.62
- ※3) 西暦 1092-1158; サキヤ五祖の一人であり, ソナム・ツェモの師でもあった。ジタリ流の無量寿成就法を翻訳したバリ翻訳師に師事しており, 極楽など四つの国土に往生したとされている。cf. 藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」(『佛敎大学総合研究所紀要別冊 浄土敎典籍の研究』2006) note 125
- ※4) Kaḥ thog pa Dam pa bde gshegs. 西暦 1122-1192; パドマサンバヴァの弟子ヴィマラミトラからの伝統のうち「スル (Zur) 系」のドプクパ (sGro phug pa. 1074-1134) の弟子の一人である。マハーヨーガの大成就者であり, 東チベットのニンマの本拠地カトク寺の創設者である。カトクパは阿弥陀や阿閼や薬師など諸仏の浄土を見ることができ, 無量光仏より直接的に成就法を授けられ, 『光明儀軌 'Od cho ga』(『無量寿經』に関連した儀軌かと思われる) を著し, 死後も極楽往生して第八地を獲得したとされる。彼の周辺情報と, 彼の伝統の継承者の中で形成されたと考えられる「極楽願文」については, 『浄土敎典籍目録』(2011) p.153 を参照。また, ロードゥ・ニンポという名は, キョプパ・ジクテンゴンポ (sKyob pa 'Jig rten mgon po. 1143-1217) の『極楽願文』にも言及されており, そこにもカトクパの伝統が継承されているようである。
- ※5) 西暦 1126-1216; カトクパの法嗣であり, この二人は「父子」とも尊称される。カトクパが建立したカトク寺は一時期衰退していたが, カルマ・カギユとニンマの人ドゥードゥル・ドルジェ (bDud 'dul rdo rje. 1615-1672) が弟子ロンサル・ニンポ (Klong gsal snying po) とともに再興した。ドゥードゥル・ドルジェはカルマ・チャクメーやミーギュル・ドルジェとも交流があった。
- ※6) 未詳。Tibetan Buddhist Resource Center の Library によると, bSod nams bu という 13 世紀の女性, Sa skya pa slob dpon ma bSod nams bu という 14 世紀の女性の名が出てくるが, 未詳。典籍名としては 'Jigs bral ye shes rdo rje (1904-87) のものがあり, mDo dgongs 'dus という文献に属するという。

『大楽国土誓願の註疏』pp.281-282 には次のようにいう—

「これは『經』<sup>※1)</sup>に「神変の力により多くの国土に行ってから, 多くの千万 (コーティ) の仏を供養した。善逝を供養してから, 食事時に極楽に再び戻ってくる。」という。変化身の国土と変化身 [とは別離があるが, それ] 以外の受用身に, 永久にお会いしないわけではない。第一 [歓喜] 地より受用身ほどにお会いすることなど適宜にある<sup>※2)</sup>。仏陀の智により昼・夜・年・月などが仮設される [が, それら] 以外に, 極楽には日・月・星, 昼・夜などの言説は無い<sup>※3)</sup>。けれども, 昼・夜が無いなら, 花の開閉と, 鳥の声を聞かせる, 聞かせないなどにより昼夜を区別していることはあるが<sup>※4)</sup>, ここにおいては, 午前・午後, 年

と劫などを数えるのは、仏の智により説かれたし、このような国土の昼夜の分から数えることが必要です。さもなければ、この国土の劫の期間について、極楽の一日として数えることが必要であるからです<sup>※5)</sup>。」

※1) 『無量寿経』「東方偈」からの引用である。cf. 『浄全』 23, pp.292-293

※2) cf. 『大乘莊嚴経論』 IX「菩提品」 60-63; 和訳研究 長尾雅人『『大乘莊嚴経論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート— (1)』(2007) p.247ff.

※3) 『無量寿経』(梵文, チベット訳)の中程(cf. 『浄全』 23, p.284)に、釈尊がアーナンダに極楽の莊嚴を説く箇所次のようにいう—

「アーナンダよ、かの仏国土には如来の言説を除くと火と日と月と星(惑星)と星宿(星座)と星(恒星)相と暗黒の名として付けられるものは全く無い。昼と夜として〔言説を〕付けられるものも全く無い。家を保持する想いも全く無い。」

また、『無量寿経』「四誓偈」(cf. 『浄全』 23, p.256)には、日月の光も虚空に輝かないことが言われているが、初期経典には涅槃について地・水・火・風・日・月を離れたものとする記述がある。体験される安楽の面から涅槃と極楽浄土が共通することはすでに指摘されているが、これもまた共通点の一つである。cf. 『南伝大蔵経 23 小部経典一』自説経 第8品 波吒離村人品 p.217; 藤田宏達「涅槃」(『岩波講座 東洋思想第九巻 インド仏教2』1988) p.280; なお、浄土に闇が無いという記述は、魏訳以外の漢訳諸本に共通してあるが、日・月・年など歳月が無いという記述は初期の漢訳『大阿弥陀経』(大正12, p.308b-c), 『平等覚経』(大正12, p.290b)のみに見られる。cf. 香川孝雄『浄土教の成立史的研究』(1993) p.107, 香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』(1984) pp.41, 233-235

なお、仮設以外には何も無いということについて、『無量寿経』(cf. 『浄全』 23, p.282)には、「その世界には天と人の区別は無い。世俗の言説により「天と人」というものの数に入る以外はそうである」という表現がある。

※4) 『無量寿経』には、日時の進行に応じた蓮華の開閉、鳥の鳴き声の有無といった直接的な記述はないが、昼夜六時に散華が起こるという記述、『阿弥陀経』にも昼夜六時に散華が起こるという記述、諸々の鳥たちが昼夜六時に鳴いて、〔五〕根・〔五〕力・〔七〕覚支の声(ことば)などを生じ、聞く者に三宝を随念させるといった記述がある。cf. 『浄全』 23, p.310-311, 284-285, 344-347; なお、昼に三回、夜に三回、合計六時に仏が大悲をもって衆生の状況を観察するという記述は、『莊嚴経論』XX-XXI 56, 同じく唯識派による仏十号の「世間解」の解説において見られる。cf. 中御門敬教「世親作『仏随念広註』和訳研究」(佛教学総合研究所紀要) 15, 2008) p.122; 同「無著作『仏随念註』と『法随念註』和訳研究」(佛教学総合研究所紀要) 17, 2010) p.77

※5) 願文自体の訳註 29 を参照。

(26) 『弁別釈』(66a4-b5; 単語の補足の幾つかは『大楽国土誓願の註疏』 pp.282-283 による)に次のようにいう—

「不浄な国土を見るよう誓願すること<sup>※1)</sup>は、〔七代までの〕遺族と僧侶の弟子たちなどが〔浄らかな〕天眼でもって明らかに見えるし、今生に〔相違分より〕守護、〔不相違分による〕救護、〔等持などによる相続の〕加持を為すし、かつてケードップ・カルマチャクメーが〔その本地である〕浄土から〔この娑婆世界に〕来られて近住〔の弟子たち〕を導いた経緯<sup>※2)</sup>のように、死ぬとき、〔彼らを〕かの極楽国土に導くことができますように!

この賢劫の〔一大〕劫（66b）の期間そのものは極楽国土の一日です。そのような劫が無数であるのに〔または、そこにおいては〕「死」という名さえも無いし、常時にその国土に生を受けますように！

後に出現されるであろう尊者マイトレーヤに始まってアディムクティ<sup>※3)</sup>までの、この賢劫の〔千の〕諸仏が、この娑婆世間にいつか出現なさるとき、神変の力でもってこの国土に来てから、かの仏を供養し、正法の甘露をその分け前として聞き、再びかの大楽の国土に、神変により障碍なく往きますように！と誓願するのです。」

※1) 『大楽国土誓願の註疏』 p.282 には、「不浄な国土の教化対象者について誓願する」という小見出しになっている。

※2) 東アジアでいうところの「還相廻向」である。敬語を用いたこの記述もまた、『弁別釈』がチャクメーの『自註釈』でないことを示している。他方、『大楽国土誓願の註疏』 p.283 にはチャクメー以外の人たちにも言及している。訳註 28 を参照。

※3) 後で言及するが『大悲経』の所説である。

(27) 『無量寿経』に直接的な記述はないが、その国土の衆生が十万コーティ・ナユタの世界を見る天眼通を得るよりの誓願（第7願）、諸国土に行つて菩提行を行うという誓願（チベット訳第22願）などが参照される。cf. 『浄全』 23, pp.240-244；訳註 7, 12 を参照。

(28) 『大楽国土誓願の註疏』 p.283 には、次のようにいう—

「それにより例示して、不浄の〔世界の〕衆生すべてに益することを願うのもある。『普賢行願讃』<sup>※1)</sup> に、「そこにおいてまた私は授記を獲得してから」などと後にも出ている。聖者ナーガールジュナと〔サキャ派の祖師〕サチェン〔・クンガーニンポ〕<sup>※2)</sup> などインド、チベット、新旧<sup>※3)</sup>の多くの学者・行者は、現在、極楽に住しておられると説かれたので、私たちがまた彼らに随うことに精進すべきです。」

※1) v. 60a；和訳 中御門敬教「往生後論攷」（『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学仏教学論叢』2004） p.39

※2) 註 25 を参照。そこではチャクメーが言及されていない。『弁別釈』の著者は、それら歴史上の人物とより身近なチャクメーを、区別していたのであろうか。

※3) gsar（新）はチベットでの新訳密教に基づく諸派を意味し、rnying（旧）はそれ以前の翻訳などに基づくニンマ派を意味する。

(29) 『無量寿経』『阿弥陀経』において、この世界と極楽世界の時間そのものの進行の比較がなされた記述はなく、修行の進み具合により対比された記述が見られる。時間そのものの進行について類似した記述としては、『俱舍論』世間品（III 77-80；cf. 山口・舟橋『俱舍論の原典解明 世間品』1955, pp.431-436）には、三界の諸天の悠久の時間がこの人間世界の時間と比較されている。他方、永観著『往生拾因』の第六因、極楽の化主を説く箇所、『華嚴経』より「娑婆の一劫を極楽世界には一昼夜となす」という引用がある。その出典について『国訳一切経 和漢撰述部 諸宗部五』（改訂版 1978） p.387 note 23 には『六十華嚴』の第三十一壽命品を指摘している。正しくは『六十華嚴』の壽命品第二十六、大正 9 No.278 p.589c3-4 と、『八十華嚴』の壽命品第三十一、大正 10 No.279 p.241a19-20 である。これは D Phal-chen No.44 Kha 393b7-394a1 に対応する。

(30) 『無量寿経』『阿弥陀経』にこのような記述は直接的に見出せないが、『無量寿経』での「修短自在の願」（梵文、チベット訳で第14願、魏訳で第13願）に、その浄土での衆生の寿命が無量であるようにいう。cf. 『浄全』 23, pp.240-241；『大楽国土誓願の註疏』 p.283 にも「誓願の力により死去を示すことを除外して。」とあって、それが言及されている。

（なかみかど けいきょう 元嘱託研究員）

〈Summary〉

A Japanese translation and study of *rNam dag bde chen zhing gi smon lam*

(bDe chen smon lam) by Karma Chags-med:

On the transferring merits for oneself and others to be born in the Sukhāvātī,  
the fourth cause to be born in the Sukhāvātī.

NAKAMIKADO Keikyo

*bDe-chen-sMon-lam* (Prayer-for-the Sukhāvātī) by Karma Chags-med (Skt. Rāgāśya. 1612–1678), a scholar, master-practitioner of bKa'-rgyud-pa and rNying-ma-pa tradition, is the most famous and influential bDe-smon (Prayer-for-the Sukhāvātī) in Tibet, as well as *Zhing mchog sgo 'byed* by Tsong-kha-pa (1357–1419), and belongs to a group of revealed scriptures *gNam chos*. In this paper, I have translated and studied, in collaboration with Mr. Fujinaka, the practices of transferring merits for oneself and others to be born in Sukhāvātī, the fourth cause to be born in Sukhāvātī of this prayer.

**Key words:** Karma Chags-med, bDe ba can gyi smon lam (bDe smon), gNam chos, *rNam dag bde chen zhing gi smon lam* (bDe chen smon lam), transferring merits